

# 守るべきもの「ハラスメント」



旭町文化センターは、同和問題（部落差別）をはじめとするあらゆる人権問題の解決に向け、相談事業や人権講座・講演会、各種文化教室などの活動を通じて、明るく豊かで住みよい人権のまちづくりを進めています。

## 8月は「差別をなくす運動月間」です

### 地域のつながり 誰でも気軽に声をかけあえる地域づくり

大分市副市長 久渡 晃

近年、社会の変化を踏まえ、日常生活もしくは社会生活において孤独を感じることに、または社会から孤立していることにより心身に有害な影響を受けている孤独・孤立状態にある人が顕在化しています。何らかの理由により孤独や孤立の状態になることは、家庭環境や社会環境の中で誰にでも起こりうることです。

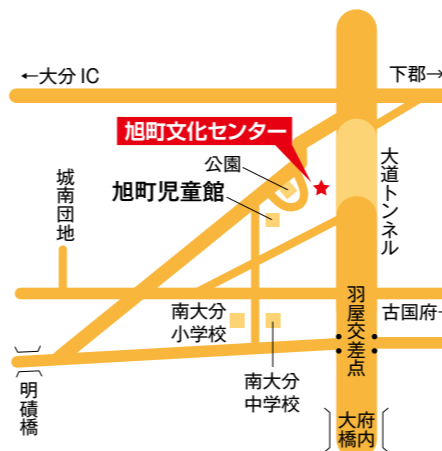
本年5月、孤独・孤立状態への対策として「孤独・孤立対策推進法」が国会で成立しました。この法律は、「孤独や孤立に悩む人を誰ひとり取り残さない社会」や「相互に支え合い、人と人のつながりが生まれる社会」をめざしています。わたしが子どもの頃を思い返してみると、近所の人たちの多くの関わりがありました。悪さをすれば近所の人に叱られ、困っていれば「どうしたん？」と声をかけられ、楽しそうなことがあれば一緒にさせてもらい、何をしても近所の人がいっつもそばにいて、いっつも見守られていたように感じます。近所の人に教えられたこともたくさんあり、そういった中で成長していったように思います。

国が全国の16歳以上の2万人を対象に行った調査から、孤独や孤立の顕在化が進むのではないかと言われています。それは、少子高齢化の進行や、単身世帯や単身高齢世帯の割合の増加など様々な理由が挙げられますが、低年齢段階でのサポートや孤独・孤立により困りを抱えた際に、声を上げやすい環境を作る必要性がうかがえます。

しかし、自分の困りや悩みは、家族や知人にさえない出せないことがあります。そのため、孤独・孤立の状態でありながら、周囲が気付かないということがあります。当事者個人の努力で解決するものと捉えるのではなく、社会問題の一つとして捉えていくことが大切です。

大分市の施設である旭町文化センターは、隣保館として、部落差別をはじめあらゆる差別の解消をめざし、地域社会の中で福祉の向上や人権啓発の住民交流の拠点となる開かれたコミュニティセンターとして、人と人とのつながり、地域ネットワークの強化に努めてきました。こうした、つながりを強め、増やしていくことが孤独や孤立に悩んでいる人への支援の一助になると考えています。

誰もが住みやすいまちづくりをめざすうえで、わたしたちの住んでいるまちの主人公はそこに住んでいる人たちです。地域で声をかけてくれる人が多ければ多いほど、みんな安心して生活を送ることができます。そして、なにより困った人が困った時にそのことが言えるような、一人一人がつながっている地域社会を作るため、住民、関係組織、行政などが包括的に支援できる体制をつくり、支え合い、助け合う地域づくりをこれからも進めていきたいと考えています。



**開館時間** 午前9:00から午後10:00  
教室の開催時刻により閉館時刻は異なります

**休館日** 土・日曜日・国民の祝日及び休日・年末年始

**お問い合わせ** 受付時間 午前8:30から午後5:15まで

**発行** 大分市旭町文化センター  
大分市旭町1番1号  
TEL・FAX(097)546-2772  
発行年月日 2023年8月1日

# みんなが幸せに なるための学習

大分市教育部長

末松

広之

新型コロナウイルス感染症の広がりが2年が過ぎ、誰もが一日も早い収束を願っています。そうした中、今でも感染者や医療従事者、その家族に対しての誹謗中傷や偏見に満ちた行動はあとを絶ちません。また昨年から、ワクチン接種に関しての偏見、差別も大きな問題となっています。

一方で、感染者や医療従事者の方々に対して、温かい声かけや、応援の行動をとる人の姿も多く見られ、こうした行動を見聞きするたびに、その温かく、優しい行動に、自分もそうありたいと思いを新たにするとともに、差別を許さない人の存在が、差別を打ち消し、差別をなくすことにつながっていることを感じています。そして、部落差別をはじめあらゆる差別をなくすための教育の必要性を再認識しています。

本市教育委員会では、誰もが通過する義務教育の中で、子どもたちが部落差別を正しく理解し、部落差別をはじめとするあらゆる差別を許さない人権意識を確立していくことが重要であると考え、児童生徒を対象に人権・同和教育講演会を5年前から行っています。

私は今回初めてこの講演会に参加しました。この講演会では、全国で精力的に

活動している講師が、実体験をもとに、部落差別の現実や仲間との出会い、仲間の大切さを語り、自らの差別をしない生き方を子どもたちに伝えてくれました。子どもたちは、「差別をしない生き方をする人が増えれば、差別はなくなる」といえる」という講師の言葉やその生き方に接し、真剣な姿勢で講師の話を聴き、質問には手を挙げ、自らの思いや体験を堂々と発言しました。

私はその姿をみて、差別を許さないという思いが、子どもたちの心に染みわたっていくのを感じ、きつと、この子どもたちは差別をしない、差別をなくす生き方を選ぶであろう、そう確信をしました。

また、私自身が、あらゆる差別に対して、他人事にしていないか、無関心になっ ていないか、相手の思いに寄り添い行動することができているのか。自らを振り返り、決意を新たにす、貴重な機会となりました。

そして、子どもたちの思い、考えが、家庭へと、大人へと伝わればとも強く感じたところです。

部落差別をはじめあらゆる差別の解消をめざした教育は、「差別の解消」をめざすことは当然ながら、自分の生き方を考える学習、みんなが幸せになるための学習であると考えます。

これからも、みんなが幸せになるために、どうしたらよいか、自分には何ができるのか、共に考え、行動していく仲間の大切さを、そして、行動することの意味を、教育活動を通して子どもたちに伝え続けていきたいと考えています。

# 心寄り添って 一歩を進めよう

大分市民部長

沖田

光宏

「どの地域で陽性者が出たのか。どこの誰なのか」「感染者が職場に居たらかなり自り命を絶つた」といつのは本気のなか」

これらは、わたしが保健所に勤務している時、実際にあった問い合わせの一部です。見えないウイルスへの不安の中、残念ながら感染者の排除につながる偏見や差別、そしてテマや誹謗中傷が存在することを痛感しました。

しかし、こういった問い合わせがあった時、わたしたちは、感染者の特定に関しては「発表されている情報以外はお答えできません」、また、確かな情報ではないことに対しては「それはおかしいです。偏見や差別につながる可能性があります」と言い続けました。粘り強く誤りを指摘し、正しい情報を発信することで、多くのおみなさんが理解をしてくださったように思います。

いわゆる「コロナ差別のみならず、部落差別をはじめあらゆる差別がいまだに存在している」とは、部落差別においては、情報化の進展に伴って悪意のある偏見の流布、被差別部落の所在を暴露するアウティングなどが起きています。確かな学びのない人が、そういった情報に出合ったら、その情報が正しいものであると認識し、差別をする立場になってしまうことが考えられるのです。

間違った情報がある場合には、出合った時にきちんと否定すること。そして、差別の現状を目の当たりにした時には、「それはおかしい」と毅然とした態度で声を上げていくこと。差別を解消していくためには、そのような行動が大切であることを、過去の自分への戒めとともに、「コロナ禍の体験から再認識しました。」

大分市では「登録型本人通知制度」を行っています。住民票の写しや戸籍謄本などを第三者に交付した場合に、登録者に対して、交付した事実を通知する制度です。多くの市民の登録が、不正に取得しようとする行為を抑制する力を高め、差別につながる身元調査をなくすことになりす。差別のない大分市」をめざして、今後もこの制度の周知に努めていきます。

最後に、保健所での体験をもう一つ紹介します。様々な意見とともに、市民のおみなさんから激励の手紙や寄せ書き、千羽鶴などをいただきました。疲弊しきっていた職員にとっては癒しとなり、元気がでました。人と人とのつながりの大切さを感じるとともに、相手の気持ちに寄り添える人や差別を許さずにくすための行動をとる人が、大分市にもたくさんいることに気がされました。

人と人とのつながりを断ってしまう差別はなくさなければなりません。差別は人がつくり出すものです。だからこそ、人がなくすことができると言えます。わたしも差別をなくす主体者の一人として、歩みを進めていきたいと感じています。

# 私から

大分市子どもすこやか部長

藤田

恵子

園では、運動会の練習に子どもたちががんばっています。いろいろな種目の中、特にリレーは子どもたちの声援も飛び交い、本番さながらの雰囲気となります。

リレーの練習中、Aさんが、「私のチームにはBさんがいるのでいつも負ける。同じチームなのはイヤだ」と言い出しました。Bさんは、足に障がいがありました。Bさんは悲しい顔をしながら泣いていました。

担任は、「子どもたちに「どうしたらいいと思うか」と聞きまわす。ある日、「どうだね、Bさん遅いなね」「見学がいいと思う」「Bさん、いつも一生懸命に走っているの」「だめだよ。一緒に走りたい」など、子どもたちからは様々な意見がでました。

そこで担任は、「Bさんは、みんなと一緒にリレーをしたいって。どうしたらいいかと思うか」と聞きます。すると、「走る距離を短くしたら」「わたしが手をつないで走るよ」など、Bさんに寄り添った意見が出てきました。Bさんは、うれしそうでした。気付くとAさんもみんなと一緒にどうしたらいいかを考えていました。それからも練習を重ね、当口はみんな笑

顔でリレーをするのができました。

子どもは小さくても自分の考えを持っています。何気なく言ってしまった差別につながる言葉があったとき、子どもも保育者もそれに気づき、相手に寄り添えるように一つ一つの行動をしっかりと考えることが大切になります。

部落差別も同じです。本人に責任がないことや努力では変えられないこと、選択できないことで、子どもたちが差別をされたり、差別をしたりすることがないよう自分自身のこととしてとらえていきたいと思えます。

私たちの行う人権・同和教育研修では、機会を通じてこのような事例をあげながら学んでいます。保育所で行われたある日の研修で、参加者から次のような感想が届けられました。

「日々の保育を行う中で、子どもたちが発する言葉や姿の中に差別の芽がないか意識を向け、一人ひとりを大切にしていきたい。そして差別について話し合う機会を持つこと、差別を受けている人が声を上げやすい環境づくりの手助けをしていきたい。そのためにも正しい知識を私たち自身が学んでいきたい。」

あらゆる差別の問題をわが事としてとらえ繰り返す学びを大切にしたい。『私から行動できるよう』学びを続け、困りを抱えている人に寄り添っていきたく思えます。

# 正しい知識を身につけ、 差別を許さない強い心を

大分市福祉保健部長

斉藤

修造

私は昨年より、仕事の傍ら大学院の福祉健康科学研究科において、地域共生社会についての研究をしています。福祉保健部では保健所業務はもちろん、障がい者、高齢者、介護保険など幅広い分野を担当することから、この分野における認識を少しでも深めたいと思ったことが、進学した理由です。

昨年、医療福祉特論の授業を受けた時のことを紹介します。「アーサー・クラインマン」という医師が書いた「病の語り」についての内容をまとめ、研究発表する授業でした。この著書は慢性の病をかかえた患者やその家族が肉声で語るストーリーを中心に構成され、医療やケアはいかにあるべきかを問う翻訳本です。その授業で、エイズに対する議論となる中、私は学生に「エイズを含め新型コロナウイルス感染症、部落差別等、いまだに多くの差別が社会には残っていますが、差別に対してみなさんはどのように思いますか」という質問をしました。すると学生からは「よく分からな」「差別は決して良くない」等の回答が返ってくる中、一人の学生が、「私は乳児院の出身で親は生活保護を受けている。将来結婚する相手が出来たら、自分の出自を言おうか悩んで

いる」と話しました。

私は、この学生が置かれている「言おうか悩んでいる」状況こそが差別の現実だと感じたのです。本来、自分のことを言いたいときには言えはいいし、言いたくない人は言わなければいい。言おうか言わないかを悩まなければならぬのは、そのことによる差別が社会にあるからなのです。新型コロナウイルス感染症が広がり、多くの人が感染し、中にはそれを隠す人もいました。感染による差別や偏見があるからです。誰かに伝えたいと思っても言えないのは、部落差別、ハンセン病に関する差別、性のあり方に関する差別などと同じだと感じました。

先ほどの学生の発言に対し、教授が「決して恥ずべき事ではないし、胸を張ってこれからの人生を生きてほしい。皆さんも部落差別をはじめとするあらゆる差別についてしっかりと学習することで、差別はいけないことを学んで欲しい」と力説している姿に共感を覚えました。

私たちは、子どもの虐待等、社会的に弱い立場の方々に対する支援はもちろん、いまだに残る部落差別をはじめとするあらゆる差別に対して、正しい知識を身につけ、差別を許さない強い心を一人ひとりが持ち、常に自分の身に置き換えて考え、言葉や行動を発することはさらに大切だと思えます。

旭町文化センターでは、広報事業として、広報誌「あさひ」を年4回発行し、南大分地区及び周辺部のご家庭にお届けしています。本特集号は、「広報誌「あさひ」」に毎号掲載される、大分市幹部職員のお話を綴った「人権を考えるシリーズ」の昨年度分をまとめ市内全世帯にお届けするものです。